

金の環の少年

浜田糸衛 著
高良真木 絵



NDC913

浜田糸衛

金の環の少年

浜田糸衛作 高良真木絵

国土社 1987

293p 22cm (現代の文学・12)

きん わ
金の環の少年

〈現代の文学・12〉

1987年1月15日初版1刷印刷

1987年1月25日初版1刷発行

著者 浜田糸衛

発行者 鈴木正明

発行所 株式会社国土社

〒112 東京都文京区目白台1-17-6

☎03(943)3721(営業) (943)8051(編集)

印刷所 株式会社厚德社

©浜田糸衛／高良真木

ISBN4-337-20512-8 C8391

金の環の少年

浜田糸衛 著
高良真木 絵



国土社

●もくじ

一章 碧い瞳 あおひとみ

5

二章 お化け騒動 ばおそうどう

47

三章 悪さ坊主 わるぼうず

79

四章 霜降山へ しもふりやま

124

五章 山の友

167

六章 あつい想い おも

206

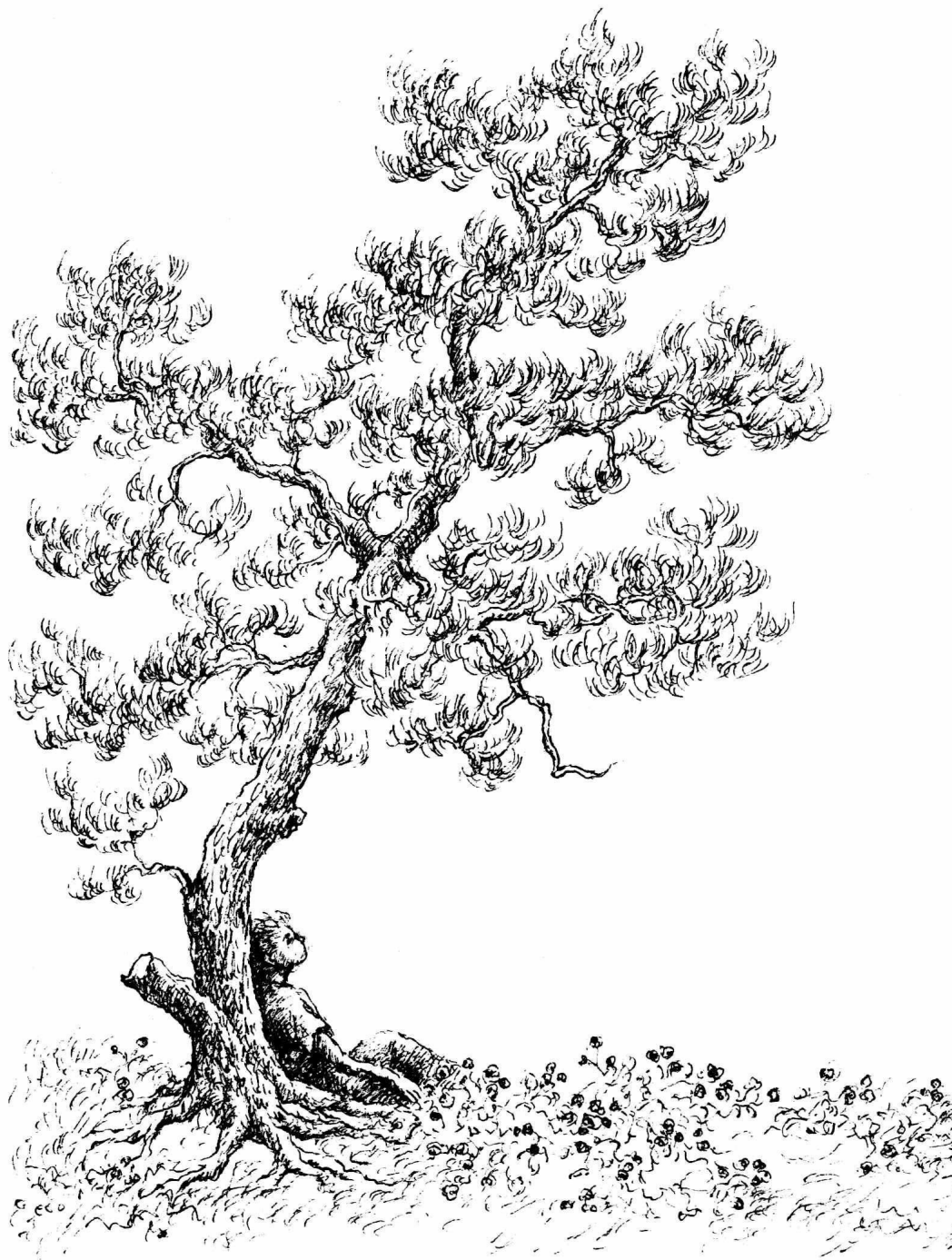
七章 山の火祭り ひまつ

237

終章 新しい道

292







浜田糸衛（はまだ いとえ）

一九〇七年高知県に生まれる。高知県立高女卒。生田長江に師事。長編小説「雌伏」出版。戦後婦人運動に携り、日本女子勤労連盟（委員長）、全日本婦人団体連合会（事務局長）、コペンハーゲンでの世界婦人大会に出席。ついでソ連、東欧、中国を歴訪。一九八六年、四回目の訪中。著書に『野に帰ったバラ』『豚と紅玉』などがある。

高良真木（こうら まき）

一九三〇年東京に生まれる。東京女子大学に学び、アメリカ・アーラム大学卒。一九五三年浜田らと共にコペンハーゲンの世界婦人大会に出席。フランスに滞在し、画業に専念。『タゴール詩集』『高良武の生涯』などの装幀、さし絵を手がける。

一章 碧い瞳 あおひとみ

1

豊かに熟れた黄いろの稲田が、はるかむこうまでひらけて、風が重くたれた穂を、たのしそうにゆきぶっている。

水のきれいな小川が田んぼにそって曲がりながらながれている。

土手には老けた草がのびぼうだいにしげって、草をかきわけるように、まっ赤なヒガンバナが、つやつや光るうすみどりの花茎を高くのばして、まるで赤い布をひいたように、どこまでもつづいていた。

右太は竹の棒をしつかり手ににぎり、火のように燃えたつヒガンバナを一つ一つ打ちながら、ゆっくり歩いていった。ピシリと風をきるむちの音がするたびに、赤いヒガンバナが川面にちつてゆく。

打ちおとされた花くびが、いくつもいくつも花もようをえがきながら、小川いっぱいにながれ

てゆくのを、右太はほほえみを口もとにたたえて、またむちをふりあげる。ときにはいちどに二、三本の花くびがいせよく流れにとびちつて、右太のよろこびを体じゆうにわきたたせた。

右太のおったあとは花のないヒガンバナの細長い茎ばかりが、うすみどりの棒をならべて、さびしく立っていた。

草刈りをしていたお鈴婆が、右太を見つけると、まがつた腰をずうーつとのぼして、

「これ、右太坊や、そつたら、むごいこと、するものじゃねえど」

と、黄いろい田んぼのむこうから大きな声でどなった。それでも右太はそしらぬ顔で、いつそうはでに手足をピョンピョンさせて、ヒガンバナをなぎたおしてゆくのであった。

「あれ、じつちや、また、はじめたぞ、右太坊が……」

「んだな、どうして、ヒガンバナが、あつたに、きらいなのかな」

吉爺も鎌の手をやすめて、あばれている右太のひよわな体を、かなしそうな目で遠くからながめた。

「花が泣いているどッ」

お鈴婆が、もう、いちだんと大きな声でさげんだ。

右太は横ぶりにあげた手を、ちよつとやすめると、しばらく考えるようすをしてから、

「ははは　なな　な　くく　ちちち　な　なん　どどど、ね　ね　え　ど。ううう　そ　そ　いえ」

キンギヨが酸素をほしがるかのように、右太は口をパクパクさせて、それでも大きな声でさ



けんだ。

お鈴婆すずばあが、もういちど、右太ゆうたをやさしくしかった。すると、右太も、

「花に口は ねえど、うそつき——」

と、いつそうひどいどもり声でやりかえした。

「口がねくても、体がいたいといつてると」

お鈴婆も負けていなかった。

それでも右太はむちをヒュウ、ヒュウ、ヒュウと鳴らしながら、目をつむって、ゆつくりと歩いていった。

「婆ばあのいうこと、きかねえやつ、かまねえでおけ」

吉爺きちじいが、とつぜん声をはりあげて、右太にあげせかけると、右太はとじた両目を、かつとひらいて、むちをばげしく左右にふりながらかけだした。

ひとふりごとに、ピシヤリ、ピシヤリとめいちゅうして、たくさんたくさんのヒガンバナが川面かわもにみだれちった。

ヒューン、ヒューン、ヒューン、秋のさわやかな空気をきって、空にひびいてゆくむちの音に、右太は耳をきんちようさせていた。

右太のすごい迫力はくりよくに、田んぼのスズメが群むらがってとびたつた。

「先代せんだいさまは、うんと、ヒガンバナがお好きすでな、村のあち、こちに球根いもうえられた。この土手ぐれえ、りっぱにしげつたところは一つもねえ。先代さまの血にさからって……ナンマミダ・ナン

マミダ……」

お鈴婆は、なにかヒガンバナの亡霊にでも祈るように、口のなかで重く唱えるのであった。

「なしてかな、このごろ、坊のするこたア、わかんねえことばかりだ」

お鈴婆は、がっかりしながら鎌を持ちなおすと、草刈りにもどった。

「わかつたら、だつれもバカだとは、いやしねえ」

爺もあぜ道の背高くのびた草をつかむと、胸に落ちこんだ石でもはらいのけるように、力を入れて、ぐざりと刈りとった。

銀いろの鎌の刃が、まぶしい太陽にキラツと光つて目にしみ、吉爺のまぶたのうらになみだがにじんだ。

「先代さまはな、えれえ、お方だった。右太坊のお父さまも、東京の大学さ出たお方だ。バカが生まれるはずがねえのになあ……」

サクサク鎌の音をはやめながら、お鈴婆がなげいた。

「バカこけ、バカの子がバカときまつているわけじゃねえし、えらい親にかしこい子が生まれると、きまつているわけでもねえど」

「そんなら、爺っちゃ、トビがタカでねくて、タカがトビ生んだつうもんでねえか」

「んだな、タカかワシか、知らねえが、トビどこじやねえな。右太坊はスズメにもなれねえな。スズメは、わが子を生んでそだてるすべ知ってるだけ、まだ、ましだな」

「若おくさまも、気の毒だな」

「ふん」

吉爺は、婆さんのあとのことばに、不服らしいそぶりを見せて、じゃけんに鼻を鳴らした。

「せめて、じゅうたろう、ぐれえに生まれてたら、若おくさまも、つらくなかったべな」

「なにゆうか。こじき親でも、じゅうたろうにや、ちやあーんとした母親があるど。バカたれぬかすじゃねえど」

「じゅうたろうは、かしこくても、父親なし子で、びんぼうだ。右太坊は……オウ、オウ、この世はままにやなんねえな」

「金持ちが、そつたにいいものか……」

吉爺は自分にいいきかせるようにひくい声でつぶやくと、

「娘っ子を、だましてにげる父親は、罪な男よ、そんな父などねくてもいい。あつたら難産にあわねですめば、右太坊もなみな子だったべな。もうなおらねえな」

お鈴婆に顔をそむけて、吉爺はあつくなつた鼻をにぎりこぶしでこすつた。

土手のむこうから、

「ゆうたアー、そんなに、ヒガンバナぶんぐつたら、死人が化けて出てくるぞうー」

一群の子どもたちが合唱するように、小川のむこうからさけびあげた。

もやしのような、ひよろながい体を、ゆらゆらさせながら、右太はつかれた両手をぶらんとたれて、棒をひきずり歩いていった。

土手の下から数十羽のスズメが、右太におどろいて、パツ、パツとむこうの田んぼへとんでゆ

く。右太は、もうろうとした頭でスズメのあとを追っていた。つぎつぎとスズメは一群ひとむれとなつてにげてゆく。

(どれが、母ちゃんかな)

(おぢちゃんは、太ってるんだべな)

(左太兄ちゃんは、どこにいるんだべ)

(姉ちゃんも)

右太は自分がむちをふりもしないのに、スズメが申しあわせたようににげてゆくのを、ふしぎな目で見おくつていた。

(どうした、この右太が、おめら、おつかねえか)

(それにしても、やったら、おめら、生まれたな。右太、生まれたとき、おれの母ちゃんは、病氣びやうきになつたのにな)

右太の胸むねの底には、いつも口にでないことばが夏雲のようにうずをまいて、その時そのときに形を変えてゆくのであつた。

(スズメの家は、どこにあるんだべな)

(どっさり、兄ちゃんや、姉ちゃんがいるから、けんかやつても、わかんねえべ)

(ばばあも、じじいも、どっさり、いるかもしれねえな)

爺と婆のところまで想おもいが発展はつてんすると、ピカリと右太の頭のすみに光が走つた。

(スズメも、ばばあとじじいが、いちばん、好きだべな)

うすくたてこめた靄^{もや}がながれさるように、右太^{ゆうた}のもうろうとした頭のなかも、少しずつ晴れ間^はをのぞかせはじめた。

彼はスズメの家族のこと、暮らしのさまなど、あれこれと想像^{そうぞう}をひろげていった。ことに、きようだいげんかの場面になると、右太のほおはあく上気^{じょうき}して力がこもった。彼はスズメの家族の中に自分と似た少年^にを一人だけつくりあげて、泣^ないたり、わめいたり、あばれたり、打たれたりさせた。

（姉ちゃんの、ばかたれ、おれは、なんにも、知らねえど）

やっぱりスズメの家でも、姉ちゃんは、おしゃべりで、ずるこく立ちまわった。

（兄ちゃんの左太^{そうた}も、やっぱり、おれを、ばかにしているな）

彼はくやしげに、ひきしめた口の中で舌^{した}をチツチと鳴らした。それでも右太は、あとからあとからと、たのしそうに頭の中へスズメの役者^{とうじよう}を登場させてあきなかった。

『右太は、わるいことしません』

細い首をコトンと胸^{むね}に落として、いかめしい父親のまえに立っている自分のすがたの場面に思いが走ると、右太の感情は高鳴った。

老松^{ろうしょう}のように大きくふところをはった、右太の父親は見あげるほど背^せが高かった。父ははじめからしまいまでひとも口をきかず、右太が、どもりどもりして、最後にあやまるまでは、指一本もうごかさず、じいーつと、太い目で右太をしっかりとみつめていた。

右太はポロリとなみだをこぼした。下の田んぼから無数のスズメがパツとちると、右太のたの

しい映像もここでコトンとふたがしまった。

彼は目の前がクラクラとしてきゆうに昏く^{くら}なったが、すこしもあわてなかった。いつものことであつた。高くのびた松^{まつ}の大木の根元にどきりとたおれると、手足を四方にほうりだし、ヒトデのようなかつこうになると、しずかに目をつむつた。青いひたいに汗^{あせ}がにじんで、頭の中が冷えていった。

(死んだら、どこさ、ゆくべ)

右太^{ゆうた}の体のどこかでチラと、うつろな感情がとおるすぎた。もうろうとした目の前を、ツルツルするような母の水枝^{みづえ}のやせたかおが、ういたりしずんだりして、能面^{のうめん}のように気味わるくあらわれて、昨日のへできごと^{へできごと}が右太の胸^{むね}によみがえってくる。

——右太さん、これ毒^{どく}ですよ。ユーレイバナといって、お墓^{はか}の仏^{ほとけ}さまだけが、好^すく花です。家の中へ入れてはいけません。

——おれ、それでも好きだ。右太の好きなもん、なんでも右太のもんだ。母ちゃんがユーレイ出るといっても、おれ、ちつともユーレイと思わねえ。夕焼けの空とおんなじでねえか。まつ赤にやけた天は、びつくりするほど、きれいだ。兄ちゃんも姉ちゃんも、あんな絵かけねえぞ。右太が、ひとかかえもあるヒガンバナをたばねて、大きなつぼにいけてたのしんだのは、つい昨日のことである。

水枝^{みづえ}は、その夜ヒガンバナを、お由婆^{よしばあ}にいいつけてすてさせた。

しばらくたつてから、やさしくほおをなでるすずしい風に、右太は目をあけた。

五体のすみずみの骨がはずれたようだけだるかったが、松の枝が傘のようにしげって、梢をのける日の光が、キラキラと右太の体にちつた。

『おいで、おいで、している』

彼はたちあがろうとして、またたおれた。

木のぼりのじょうずな右太は、地上よりも木のうえで暮らすときが多かった。そこにおればだれも彼に声をかけないし、気づいても、わざわざのぼってくる者もない。それよりも、右太にとってうれしいことは、四方八方、里も丘も田んぼも人も、彼の眼下に平伏して、高い山も空の雲まで近くに見えるのであった。

草のにおいが鼻について、小川の流れがチョロ、チョロ耳にころがると、右太の意識もゆつくりともにもどった。頭のうえでかわいらしい野ギクが風にゆれていた。トンボがまるい花にとまろうとして、小さな角い胸を花につけては、ぐあいわるそうに花からはなれる。また止まろうとする、そしてすぐはなれる。

（なにか、気にいらねえのか）

右太は、クスリ、クスリ、声をたてないでわらった。青くすんだ深い空の下を、白い雲が丘をつれ、森をしたがえて、村ぜんたいで旅をしている。ネコも、牛も馬も、井戸も小屋も、ちぎれた雲の中にあつた。

（どこさ、ゆくのかな）

つるつるした滑石なめしのように右太の心はなごんでねむたくなってきた。もう空も見ないで、松の下をとるおだやかな微風びふうに体からだをまかせていた。

ユウタ　が　ドモった
ソウタ　に　ドモった
カラス　は　しろい

ソウタ　が　いった
ユウタ　に　いった
カラス　は　くろい

ユウタ　は　ドモった
ガンコ　に　ドモった
カラス　は　しろい

ソウタ　が　おこった
ガンコ　に　おこった
カラス　は　くろい